下）は358例，全外来患者に対する比率は1.2%を呈し9年間増大傾向をみなかった。部位別では鎖骨，上腕骨顆上，前腕骨に多かった。受傷原因として落下が最も多く，近年交通事故は減少しスポーツによる受傷は増加している。観血的治療を要した症例は16%と他家の報告に比し多いが，他院よりの手術適応症例の転送，上腕骨内側上顆骨折の観血的療法が多い為と思われる。

40．小児上腕骨顆上骨折の保存的療法について

○武内重樹，斎藤　隆，宜保晴彦
平山博久　（船橋中央）

昭和46年11月より昭和54年12月までに，小児上腕骨顆上骨折37例に対し垂直牽引療法が施行された。今回19例を直接検診し，遠隔成績を検討し良好な結果を得た。

垂直牽引療法は，徒手整復なしにほぼ満足しうる整復位が得られ，内反肘防止に有効であり，内反肘を認めても軽度である。前方凸変形は矯正しにくいが，長期間に小児の旺盛な自家矯正力により改善され，この変形により招来される機能障害は，ほとんど認めない。

41．小児上腕骨顆上骨折の治療成績

○加藤義治，大木健資，音琴　勝
鎌田　栄　（君津中央）
久米通生　（久米整形）

昭和48年4月より，本年7月までに当科を受診した小児上腕骨顆上骨折47例に非観血整復後経皮的 K-Wire 固定（橈側より2本）を中心とする治療を行なった。今回この47例のうち32例に平均3.4年の追跡調査を施行した結果，肘関節可動域については，満足すべき結果を得たが，Carrying angle の減少傾向を認めた。内反肘発生に関しては，末梢骨片の橈側凸軸転が最大の要因であるが，他に骨端部の発育異常と考えざるを得ない症例も存在した。

42．筋性斜頸観血的治療例の予後

○高田啓一，竹内　孝，村山憲太
吉野紘正　（国立習志野）

筋性斜頸観血的治療例の中で，現在10歳以上になった症例を追跡調査した。術後成績は問題なかったが，患者側の不満は手術瘢痕であった。胸鎖乳突筋下端の皮膚切開線は，調査時には，さまざまな場所に移動しており，幅2mm 以上の過剰瘢痕は全例鎖骨上に乗っていた。1歳前後に手術適応のなかった軽症斜頸例には，ある時期に急激な斜頸増悪が見られる症例も多いため，成長終了まで経過観察を続ける必要がある。

43．先天性肩甲骨高位症（Sprengel 病）に対する Chigot 法による手術治験例

○柳生陽久，石田三郎，上原　朗
（桜ケ丘育成園）
辻　陽雄　（富山医科薬科大）

1891年 Sprengel が先天性奇形として肩甲骨高位症を詳細に報告した。この疾患に対する手術も，いろいろあるが，報告された手術例はわずか20数例である。手術の目的は，変形と肩関節運動制限の著明なものを対象とする。過去報告された手術は，高位にある肩甲骨を引き下げ，ひき下げた位置に固定保持を目的としたが満足のいく術式はきめがたい。1970年に Chigot が肩甲骨内側$^{2}/_{3}$を切除するのみで，比較的良好な結果を示したので追試し，一応納得のいく術式とみなした。

44．先天性下腿偽関節症の1例

○高橋淳一，小野　豊，新井貞男
（千葉労災）

先天性下腿偽関節症の一例を経験した。生下時より左下腿彎曲があり，生後6カ月で下腿偽関節となった。生後7カ月で髄内釘＋骨移植を行うも骨ゆ合得られず，保存的療法を経て生後3年で，病的骨膜切除＋プレート固定＋骨移植により骨ゆ合が得られ現在4歳で下肢の機能も良好である。本人と母親，祖父に神経線維腫症の所見があり，病変部に異常に肥厚した骨膜と線維性骨異形成症の所見が組織学的に認められた。

45．ペルテス病の治療成績

○亀ケ谷真琴，秋田　徹，今井克己
平松健一　（千大）
土屋　恵一（県立佐原）
吉野　紘正（国立習志野）

昭和34年以後加療したペルテス氏病患者85例中，直接検診した42例に治療法別成績を検討した。調査対象は，A中間位免荷群20例24関節，B内旋外転位免荷群22例22関節である。X線成績は mose 法・AHI を使った° X線総合成績はB群が良好であった。初診時年齢5歳以下 Catterall 分類Ⅰ・Ⅱ型は両群とも良好であり，6歳以上Ⅲ・Ⅳ型ではB群がより良好だった。又 Head at risk の存在例は予後が悪く，A群では，20例中8例が初期関節症であった。